

小・中学校国語科研究部

I 研究主題

生き生きと自ら学ぶ児童生徒の育成

—自分の考えをもち、伝え合うことのできる授業の研究—

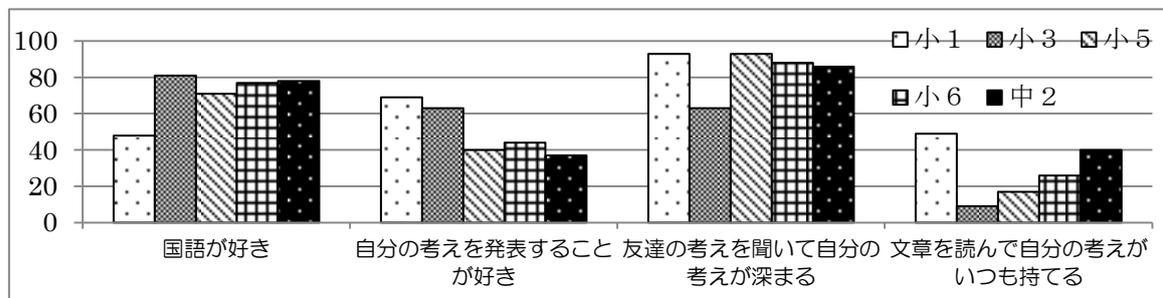
II 主題設定の理由

本研究部では、研究員の基本テーマである「主体的・協働的な学び」について、その実現を図るには、どのような授業を行い、手立てをどのように講じていけばよいのか考えた。そこでまず、日々私たちが国語科の授業を行う中で感じる児童生徒の課題について話し合った。すると大きく分けて以下の2点が挙げられた。

- ・授業中に自分の考えを表現する児童生徒の固定化
- ・学びの姿勢が受け身であること

次に、児童生徒の国語科の学習に対する思い・傾向を把握するために、アンケート調査を実施した。

(調査対象 5校 168名 小学1年生、3年生、5年生、6年生、中学2年生)



・国語科の学習を「嫌い」と感じている児童生徒はどの学年も多くないが、学年が上がるにつれて自分の考えをみんなの前で発表することに対して抵抗を感じる児童生徒の割合が増えている。

- ・友達の考えを聞いて自己の考えが深まると感じている児童生徒が多い。
- ・文章を読んで、自分の考えを全くもつことができない児童生徒は少ないようだが、考えをいつももつことができる児童生徒も少ない。

結果から、児童生徒が自分の考えをもち、主体的に学ぶことができるような手立てを工夫するとともに、学んだことを共有したり、深め合ったりする場を国語科の学習の中で設定することが必要だということが分かった。

これらの実態を踏まえ、研究テーマを「生き生きと自ら学ぶ児童生徒の育成～自分の考えをもち、伝え合うことのできる授業の研究～」と設定した。

III 研究の内容

1 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

(アプローチ①「意味ある問いで学びを見通す」より)

学習に見通しをもたせ、単元のゴールを明確にすることによって子どもの学ぶ意欲、必然性が生まれるのではないかと考える。そこで、指導事項と教材の特性、児童生徒の実態、既習経験をもとに「単元を貫く言語活動」を設定する。その授業で付けさせたい力を明確にし、児童生徒がより主体的に学べる言語活動の選択、単元指導計画の工夫を研究する。

2 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

(アプローチ②「多様な考えを引き出し交流する」より)

主体的・協働的な学びにおいて大切なことの一つに、「自分の思いの表現と深まり」があると考えられる。1時間の授業の中に、発達段階に応じた児童生徒相互の交流活動を取り入れるとともに、その在り方の研究を進める。子どもたちにとって「何のための交流なのか」という、交流を行う必然性を明確にしていく。

3 自己評価(相互評価)を取り入れる

(アプローチ③「学びを自覚する機会を重視する」より)

メタ認知能力の育成や自分の学びの深まりを意識させるために、発達段階に応じて終末を自分の言葉でまとめさせたり、授業や単元の振り返りを書かせたりする等の手立てを考える。授業の中で学びを自覚する機会をどのような形でつくっていくか、自己評価(相互評価)の工夫について研究する。

IV 実践例

1 小学校第1学年の事例 (教材名「うみのかくれんぼ」)

(1) 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

- ① 「いきものずかん」を作ることを単元のゴールに位置付け、学習意欲を高める。
- ② 学習の見通しが持てるよう「学習の流れ」を掲示する。
- ③ 単元のゴールをイメージできるよう教師がモデルを作成し児童に提示する。

指導計画

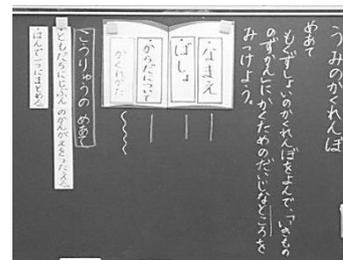
第一次	第二次	第三次	第四次
「いきものずかん」を作ることを知り、学習の見通しをもつ。	「うみのかくれんぼ」を読む。	自分の「いきものずかん」を作るために図鑑や科学的な読み物を読む。	自分の「いきものずかん」を作成し、友達に紹介する。

本単元では、「読むこと(1)エ 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと」を受け「いきものずかん」を作るという言語活動を設定した。教師が作った生き物図鑑を見せると、児童からはすぐ、どんな生き物を図鑑にしたいか声が上がった。また、学習の流れを掲示したことで「今日は、『たこ』についての勉強だね。」「もう少しで図鑑作りをするから、僕はどの生き物にするか決めたよ。」と見通しをもって授業に臨んでいる姿が見られた。

(2) 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

- ① 交流の目的を明確にする。
- ② 班での交流活動で自分の考えを広め、クラス全体での交流活動で自分の考えを深める。

なぜ交流するのか、交流の目的を明確にしたことで、班での交流では自分の考えを進んで発表していた。一方の中にはワークシートに書くことで満足し、発表せずにいる児童も見られた。班の中で考えが異なっていると、前時の授業を振り返りながら、「〇〇さんの考えがいいね。」とそれぞれの違いを認めながらよりよいものを選ぶ様子も見られた。全体で交流するときには、各班でまとめたものを黒板に貼り、考えの違うところは、意見を出し合っ



い考えを見つけようとしていた。

(3) 自己評価（相互評価）を取り入れる。

自己評価は、授業の終わりに、本時の交流活動について、自分の気持ちに合うものを◎○△の中から選ぶというやり方で行った。選択式のため、全員の児童が振り返りをする事ができたが、より細かな児童の変容やその評価をした理由が捉えにくかった。

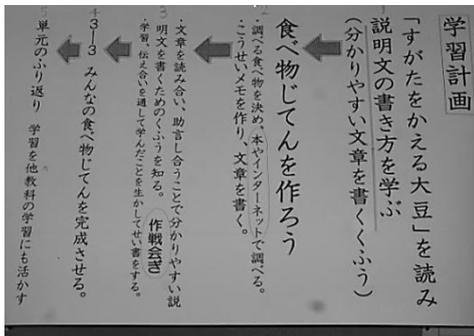
(4) 成果と課題

「いきものずかん」を作るという単元のゴールを設定したこと、学習の流れを掲示したことで、児童が進んで学習に取り組む姿が見られた。また、学習後も「もっとたくさんの生き物を図鑑にしたい。」と生き物図鑑を作り続けている児童もいた。交流活動に関しては、1年生の段階では、自分の考えを広めることをねらった交流活動は、4人の班では人数が多かった。二人組が有効であると感じた。また、交流の仕方も一つ一つ指導をしていく必要がある。振り返りの工夫については、選択式の振り返りを積み重ねるとともに記述式の振り返りをどの時期から取り入れていくのかが、今後の検討課題である。

2 小学校第3学年の事例（教材名「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」）

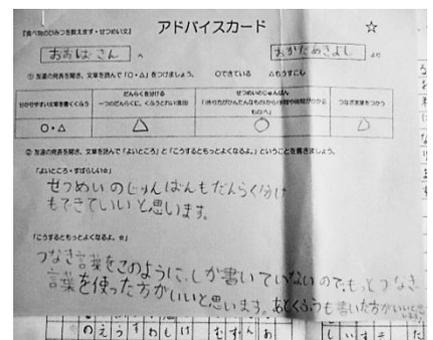
(1) 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

学習に見通しをもたせ、学習のゴールを明確にすることによって、学ぶ意欲と必然性が生まれるのではないかと考えた。そこで、学習指導要領「B 書くこと」における指導事項「(1) ア・イ・ウ・カ」、言語活動例「ウ」を受けて、「みんなの食べ物事典をつくろう」という単元の目標を設定し、学びの工程の可視化を行った。具体的には、単元の学習計画表を掲示し、学習の見通しとゴールを常に意識できるようにした。また、並行読書を行えるよう、教室内に常に関連図書を置くようにした。



(2) 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

小学校第3学年の「B 書くこと」における交流に関する指導事項は、「書いたものを読み合ったり音読したりして発表し合い、考えの明確さや書き方の巧さなどについて意見を述べ合うこと」である。このことを踏まえ、自分で考えて書いた説明文をグループで読み合い、よいところや工夫するとよくなる所を見付け、助言し合い、より分かりやすい説明文を書くという協働的な活動を設定した。



アドバイスカードを活用した相互評価

(3) 自己評価（相互評価）を取り入れる

各時間の学習の中で振り返りを取り入れ、自分が学習のめあてに対してどの程度まで達成できたかを把握し、次の学びにつながる自己評価を行えるようにした。また、アド

バイスカードを活用した相互評価を行い、互いの説明文の改善点を伝え合って、文章の推敲に役立てた。また、形成的評価を取り入れ、児童一人一人の学習到達度に応じた目標を設定し、学びを自覚できるようにした。

(4) 成果と課題

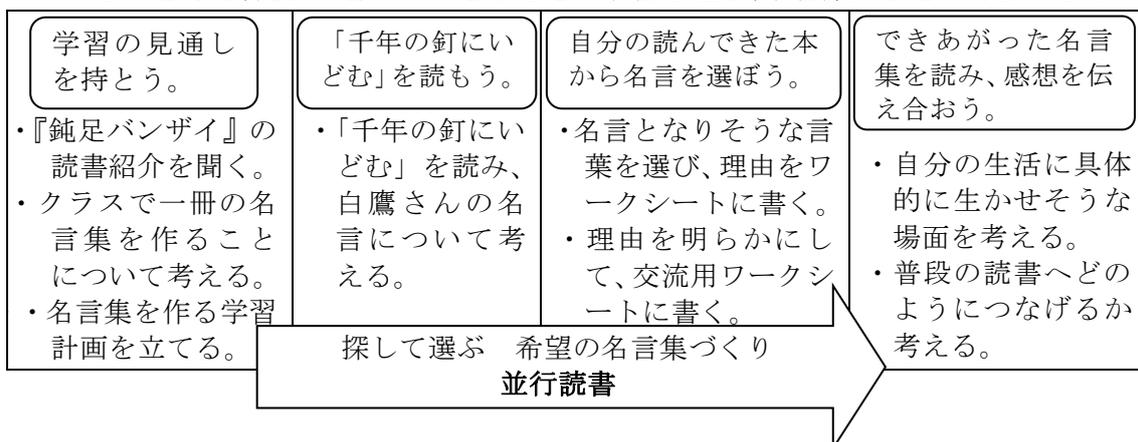
単元の学習計画表で学びの工程を確認して学習を進めたことで、学習を通して身に付けるべき力を意識しながら見通しをもって学習に取り組むことができた。また、授業の始めに、教師自作の食べ物事典の表紙を見せ、みんなで一つのを完成させることを伝え、「楽しそう。」「つくりたい。」といった声上がり、学習意欲を喚起することができた。協働的な学習においては、習熟度の異なるグループをつくり、助言し合う学習を進めたことで、書き方が分からない児童は、助言により分かりやすい文章を書く工夫を学ぶことができた。習熟度の高い児童も、助言をしたり、自分と友達の書き方を比較したりすることで、改めて理解を深めることができた。友達からの助言を受け、自分の文章を見直し「早く書き直したい。」と言いながら学習を進める姿が見られるなど、交流を通して学習意欲を高め、より分かりやすい説明文を書くことができた。また、本単元で身に付けた力を社会科や総合的な学習の時間で活用することもできた。

課題としては、グループ学習を4人で行ったが、時間がかかり、集中力が途切れる児童が見られた。学習の内容によってグループの人数を調整することが必要であると感じた。振り返りについては、発問や指示等を精選し、時間配分を適切に行って、振り返りの時間を十分確保できるようにしたい。また、相互評価をする際の評価の観点について理解できていない児童が見られた。全ての児童が評価の観点を明確に把握できるように、児童の実態、既習経験を踏まえ、具体的な視点を提示するようにしたい。

3 小学校第5学年の事例（教材名「千年の釘にいどむ」）

(1) 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

児童の実態、教材の特性から、「C 読むこと」の「イ 目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること」、「オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」を中心として指導した。この事項を指導するために、「希望の名言集」を単元のゴールに位置付けた学習を行った。これは、教材文「千年の釘にいどむ」に登場する白鷹さんのように、素敵な生き方をしている人の本を読み、その中から自分が前向きになる名言を見付け、その人の生き方と関わらせながら、その言葉のよさを紹介する活動である。そのためまず、教材文「千年の釘にいどむ」を読み、白鷹さんの生き方から感じたこと、学んだことなどをまとめ、発表し合う活動を行った。その人の生き方を知るからこそ、言葉の重みを感じることができると考え、発表し合ったことをもとに名言を選び、名言集にまとめる活動を行った。



(2) 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

5年生における「読むこと」における交流活動のねらいは、「本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」である。そのため、交流の目的に応じて同質グループと異質グループとを使い分けて交流をさせた。そうすることにより、自分がたどってきた思考過程が言語化され、思考が整理され、自分の考えが深まると考えた。

また、意見交換で終わることのないよう、ワーク（作業・動き）のある交流を取り入れた。具体的には、考えをグルーピングするための付箋や、グループの考えをまとめるためのホワイトボード、話合いの進め方を理解するためのカードなどを活用し、「交流すること」を意識させるようにした。またホワイトボードに書く際にはベン図などを活用させ、グループ内の考えが整理できるようにした。

(3) 自己評価（相互評価）を取り入れる

学びを自覚する機会を設けるために、「まとめ」と「振り返り」を区別して行うようにした。まとめは、めあてに対してのまとめであり、その時間のめあてとの整合性が図れるよう意識させた。ふりかえりは、1時間の授業を通して「進んで活動できた」や「友達の話聞いた」などの観点で振り返らせ、アクティブ・ラーニングの視点でのまとめを意識して行わせるようにした。

(4) 成果と課題

指導事項を明確にし、学習計画を立てることで、子どもは見通しを持って学習に臨むことができた。また交流活動を取り入れることで、答えを待つのではなく、自分たちで課題を解決しようとする積極性が育まれた。児童同士の関わり合いも増え、自分の考えを相手に伝えるためにはどう話せばよいのかと言葉を選ぶ意識や、折衷案を考え出す力も付いたように感じる。さらに、自己評価を行わせることで、次時の授業への臨み方を考える児童が増えた。

課題は、単元のゴールを意識するあまり教材文の読みが浅くならないように、指導計画を工夫していくことである。また、自己評価の視点や、相互評価の仕方のバリエーションを増やしていくことも大切である。

4 小学校第6学年の事例（教材名「森へ」）

(1) 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

単元の目標は、「これまでの本との関わり方について振り返り、本のよさや自分の考えが明確に伝わるように構成を工夫しながら、選んだ本の紹介をすること」である。活動の最終目標を図書館に推薦文（ポップ）を掲示し全学年に見てもらおうこととした。児童が学習の見通しをもつことで、主体的に学習に取り組む意欲をもつことができると考えた。

第1次	第2次	第3次
・「森へ」の朗読を聞く。 ・単元の見通しをもつ。	・「森へ」を読み、筆者の五感を使った表現、比喩、擬人化の表現の工夫を学ぶ。 ・筆者の表現の工夫を使った短文作りを行う。	・「森へ」の推薦文を文章にまとめ、発表し合う。 ・学んだことを活かして自分の選んだ本の推薦文を書く。 ・自分の選んだ本のポップ作りを行い図書館にプレゼントをする。

(2) 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

交流のねらいを、「自分の考えを友達に知ってもらう」、「友達の意見を聞いて自分の意見の参考にする」とした。

また、「森へ」を読んで筆者の五感を使った情景描写の工夫や驚き、疑問を表す表現、擬人化や比喻表現のように、効果的な表現に注目させた。筆者の心情を想像し、話し合う場面では、最初に個人で考え、次にグループで意見を交流し、最後に全体で発表して様々な意見に触れさせた。普段、自分の意見を自信がなくて発表できていなかった児童もグループで出し合った意見なので自信を持って発表ができるようになると思った。



(3) 自己評価（相互評価）を取り入れる

授業の始めにめあてを確実に提示し、最後にはまとめを自分の言葉で書くことを習慣にし、本時での自己の学びを明確にとらえられるようにした。

(4) 成果と課題

単元を貫く言語活動を設定したことで、活動の目的や見通しについて、児童の意識を高めることが出来た。「交流活動」を取り入れたことで児童の考えに変容が見られた。7月と12月で同じアンケートを実施した結果、交流に関する項目の全てにおいて肯定的に考えている児童の割合が高まっていた。特に、「自分の考えを発表することが好きか」の問いで「好き」と「どちらかといえば好き」の割合が大きく増加した。

しかし、課題として「文章を読んで自分の考えがいつももてる」の問いについて、「いつももてる」と「もてる」の割合が減ってしまった。その原因として、交流活動に多くの時間をとってしまったため、自分で考えず、友達の意見を聞いてから考える習慣がついてしまった児童がいたことが考えられる。以上のことから、交流活動に入る前の一人で考える十分な時間の確保が大切であると考えた。

5 中学校第2学年の事例（教材名「モアイは語る―地球の未来」）

本単元では、「C読むこと」の「イ 文章全体と部分の関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」、「エ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること」を目標の中心におき、指導を工夫した。

(1) 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

「紹介カードを書こう」という目標をはじめに示し、単元のゴールとした。「紹介カード」は、生徒が夏休みの宿題として一度取り組んだ課題である。教材文を一冊の本に見立て、本文の紹介に加え自分の意見を書かせた。生徒にとって、「紹介カード」という課題は、完成の形が想像しやすく、難しい論説文も関心をもって読み進めるのに適切な手段だと考えた。また、授業では、毎時間、本時の目標と手順を先に示してから、学習を進めるようにした。

(2) 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

学習指導要領の中学校第2学年「C読むこと」の言語活動例には、「イ 説明や評論どの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること」とある。以下のように交流の手立てを設定した。

【交流の手立て】

① テーマに沿った小さな意見交換の場を設けた後、



自分の考えをまとめる個人の課題に取り組む。

② 4人班で、一人ずつ仕上がった課題を発表し合い、読み合う中で、よかった点、感想を伝え合う。

③ 班の代表者にクラス全体の前で発表させる。

「紹介カード」を作成するに当たり、先に題名となるキャッチコピー案を作成させた。キャッチコピーは文章の内容を端的に表す、他者に分かりやすく興味を持ってもらえる言葉である。アンケートからわかるように、多くの生徒は他者の意見が参考になると知っている。キャッチコピーという小さな交流を先に行うことで、多くの生徒が意欲と自信を持ってカードを作成できるのではないかと考えた。

さらに、仕上がった紹介カードをもとに交流を行った。小さな交流を、大きな交流につなげたことで、理解を広げ、深めようとする姿勢が広がったように感じられた。

(3) 自己評価(相互評価)を取り入れる

自分の紹介カードを4人班で発表し、一人ずつよかった点や感想を伝え合った。授業の終わりに、ノートに感想を書いてもらおうと、「ほかの人たちはすべての文を感想にしたり、教科書のキーワードを入れたりしていたので、次は自分もキーワードなど入れて発表したい。」「今日の発表を聞いて、聞いている人たちに語りかけたり、読んでほしいという気持ちを書いたりするのがよいと思ったので、次はよいと思ったところをまねして書こうと思った。」など自分のよかったところを友達から認められることで、振り返りができ、さらに自信にもつながったようである。

交流場面は発言によるものが多かったが、振り返る場面では一人一人の考えや思いを書き残し、自分の変容を確かめることも大切だと感じた。

(4) 成果と課題

生徒の感想や、取組の様子から、自分の言葉で理解したことを書き表すことによって、さらに理解が深まること、また他者との交流を行うことで、自分の作品を客観的に振り返って考えることができることを再確認できた。

中学校2年生の12月アンケートの結果では、「友達の意見を聞き、自分の考えが深まりますか」という問いかけに、「いいえ」と答える生徒が減少した。一方で、「文章を読み、自分の考えをもてますか。」という問いに、「いつももてる」が減少している。ほかの項目では、ほぼ変わらない。このことから、生徒は、交流活動によって理解は深まるが、自分の考えを明確にすることに難しさを感じているのではないかと考えた。

学習や交流を通して理解を深めたことをどのように相手に伝えるか、が大切だと感じた。相手に伝えようとしなければ、そして、伝わらなければ、自分の理解がどれほどのものかは相手には分からない。自分の考えを表現する力を身に付けさせることで読む力も付いていくのではないかと感じた。国語の力とはある一角ができればよいものではなく、総合的な力である。ポイントを絞って、多方面から満遍なく学習を行うことが重要であると感じている。

V 研究のまとめと課題

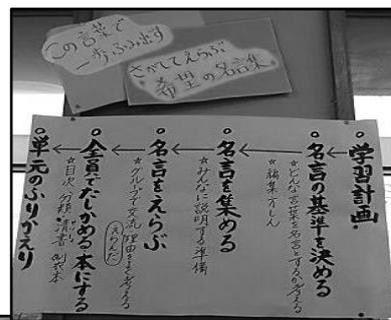
1 主体的に学ぶための単元を貫く言語活動の設定

本研究部では、指導事項を指導するために、そして子どもたちがより主体的・協働的に学べるようにするために、学習過程を質的に見直すことを意識して実践を行った。そのために以下の手立てを講じた。

(1) 学習の見通しを持たせ、学習意欲を喚起する工夫

① 掲示物の作成

単元（学習）計画表を作成し、教室に掲示した。その学習が終わると印をつけて、今どこを学習しているのか確認できるようにした。そうすることで、学習の見通しをもつことができ、主体的に学習に取り組むことができるようになった。



② モデル作品の作成

児童生徒が「やってみたい」と前向きにとらえられるような学習のゴールを考え、事前に作成し、提示した。そうすることで、意欲的に学ぶ姿勢につながると同時に、児童生徒のつまづき場面を事前に把握することができた。



(2) 児童生徒に付けさせたい力を明確にする

教材を吟味し、そこから学習指導要領に立ち返り、付けさせたい力を明確にした。

2 義務教育9年間を見通した交流活動の工夫

(1) 交流活動の指導の系統性

(小) 1・2	(小) 3・4	(小) 5・6	(中) 1	(中) 2	(中) 3
文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、 <u>発表し合う</u> 。	文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について、 <u>違いのあることに気付く</u> 。	本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを <u>広げたり深めたりする</u> 。	文章に表れているもの <u>の見方や考え方をとらえ、自分のもの見方や考え方を広くする</u> 。	文章に表れているもの <u>の見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつ</u> 。	文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、 <u>自分の意見をもつ</u> 。
①交流の目的 「自分の考えを発表しよう」 ②ペア	①交流の目的 「自分の考えと友達の考えの違いを見付けよう」 ②3人グループ	①交流の目的 「友達の考えを自分の考えに活かして発表しよう」 ②4人グループ	①交流の目的 「文章から学んだことを自分の考えに活かして発表しよう」 ②4人グループ	①交流の目的 「自分の知識や体験と関連付けた考えを発表しよう」 ②4人グループ	①交流の目的 「自分の生活よりも広い社会や自然についての自分の意見を発表しよう」 ②4人グループ

このように、発達段階に応じてどこまで指導するのかを明確化し、指導にあたるようにすることにより、義務教育9年間を見通した計画的な交流活動の在り方について研究を深めることができた。

(2) グループ編成の工夫

学年が上がるにつれ、グループの人数を増やした。話し合いをする上で、主体的に参加できる人数は4人が上限であると考えた。同質・異質グループにするかは、そのときの

ねらいに応じて変えるようにした。グループ編成の工夫を行うことで、児童生徒一人一人が主体的に話し合う姿が見られた。

3 自己評価（相互評価）を取り入れる

子どもたちが学びを振り返り次の学びに向かうことができるような自己評価を取り入れた。アクティブ・ラーニングの視点で項目を設定し、低学年は選択式、高学年は項目の選択と記述、中学生は自由記述をさせるようにした。

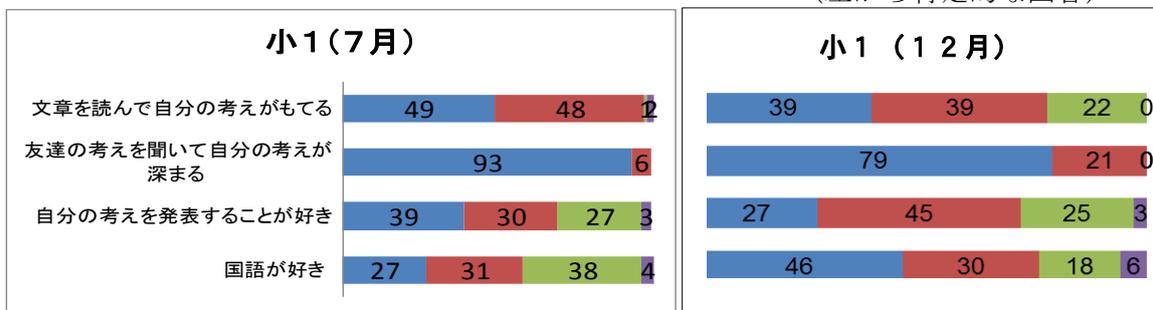
児童生徒は、学習による自分の変容や成長を実感することができた。

学年	主な選択肢
低学年	① 自分の考えを友達に言えたか。 ② 友達の意見を聞けたか。
中学年	① 伝え合いに進んで参加することができたか。 ② 友達に、より分かりやすい説明文を書くためのアドバイスができたか。 ③ 学習、伝え合いを通して学んだことを生かして、分かりやすい文章を書くために工夫したこと。(記述)
高学年	① 自分の考えを発表できたか。 ② 1時間で分かったこと・分からなかったこと。(記述) ③ 友達の考えを聞いて自分の考えが変わったか。(記述)
中学生	今日の授業を振り返り、感想を書く。(記述)

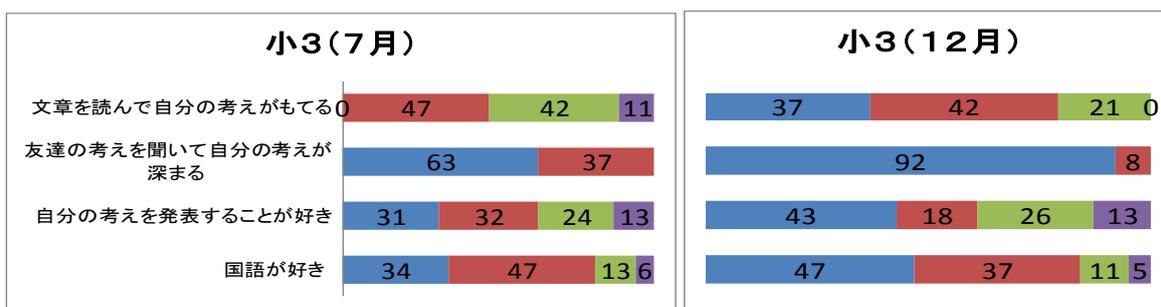
4 アンケート結果から見る児童生徒の変容

本研究部では、7月と12月に研究主題に関わるアンケートを実施した。

(左から肯定的な回答)



小学校1年生のアンケート結果では、7月と比べて国語が好きな児童が増えた。これは、「いきものずかん」に主体的に取り組んだことが心に残ったのだと考えられる。一方で、交流活動に対して消極的にとらえる児童が増えたことから、今後児童が意欲的に取り組んでいけるような手立てを工夫していく必要がある。

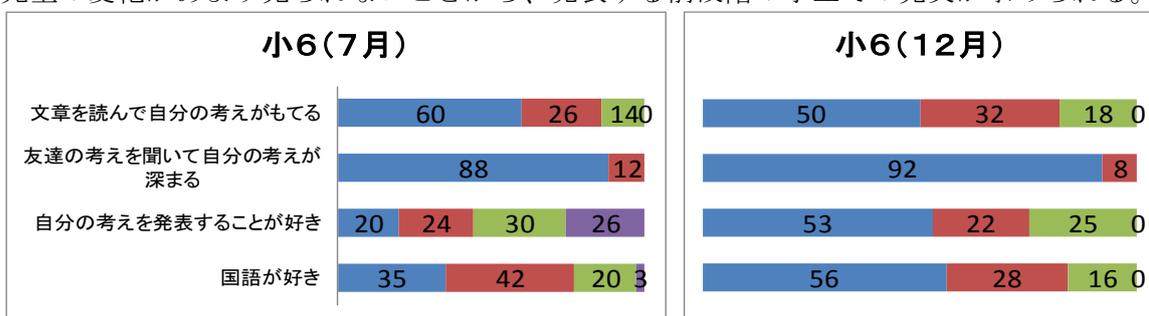


小学校3年生では、7月の調査と比べて12月の調査結果ではすべての項目で改善が見られた。自分の考えをもった上で、友達の考えを自分の考えを深めるヒントとしてとらえる児

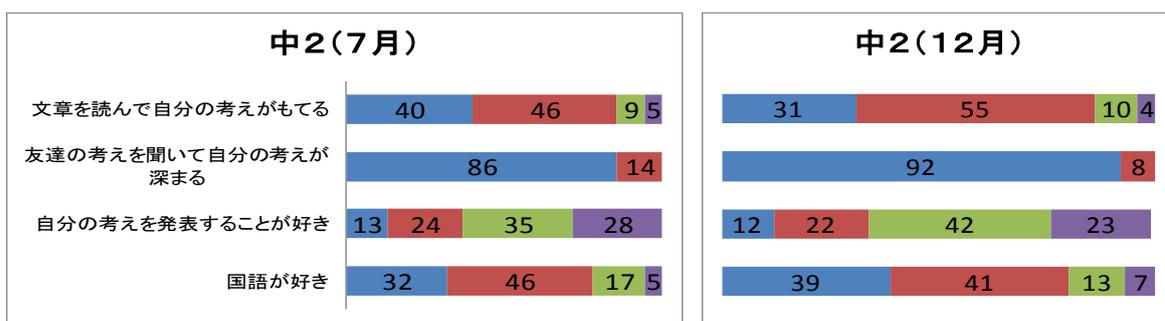
児童が増え、交流活動の有効性が見られた。交流カードを作成し、交流の観点を明確にしたことが、考えの深まりにつながったと考えられる。



小学校5年生では、自分の考えを持つことのできる児童が7月の18%から、60%に増えたことが成果として挙げられる。単元のゴールを目指しながら、しっかりと教材文に向き合い、読みとることができたと言える。一方で自分の考えを発表することを肯定的にとらえる児童の変化があまり見られないことから、発表する前段階の手立ての充実が求められる。



小学校6年生では、全体的に改善が見られた。特に自分の考えを発表することに抵抗を感じる児童が大きく減少し、全体の75%が、自分の考えや思いを表現することを肯定的にとらえるようになった。残りの25%の児童にも自信をつけさせ、表現することの楽しさを味わわせたい。そうすることで、交流活動がさらに活発となり、さらなる思考の深まりが期待される。



中学校2年生では、7月と比べ全項目で目立って大きな変化は見られないが、全体的にほぼすべての項目において肯定的にとらえる児童生徒が多かった。一方で、自分の考えを発表することへの抵抗感が拭えない生徒が65%存在することから、交流活動への参加のさせ方を工夫する必要がある。

VI 今後の授業実践に向けて

本研究では、3つの内容をもとに様々な指導方法に取り組んできたが、方法論のみが先行しないよう、国語科の指導で求められる力の育成を目指すとともに、目の前の児童生徒の実態を把握し、今後も指導の工夫改善に努めたい。